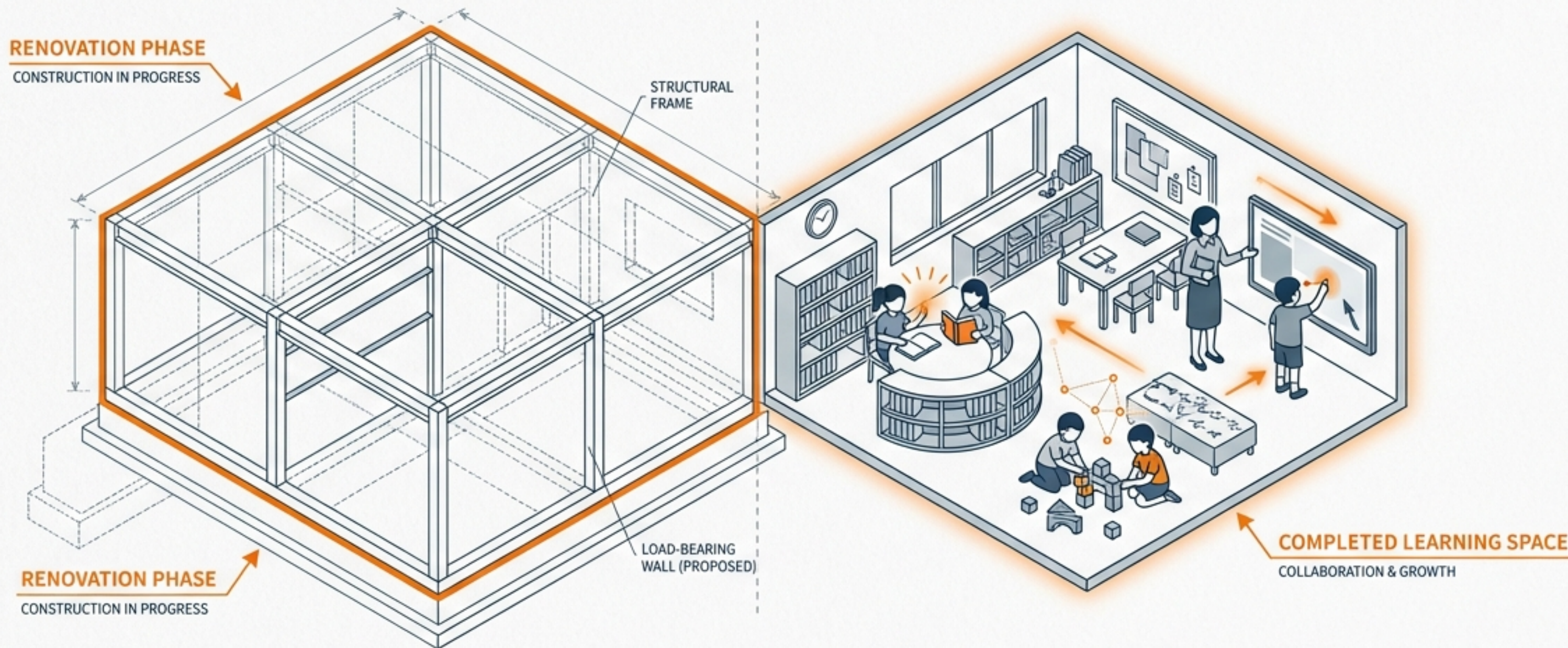


「新たな学びの空間」の構築：小1の壁を越えて

放課後児童クラブの教育リノベーション設計図



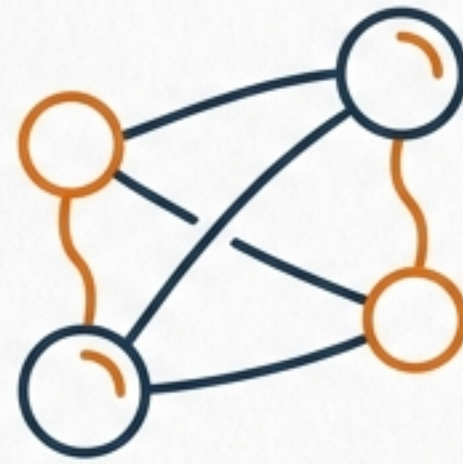
教育リノベーションの全体像

背景



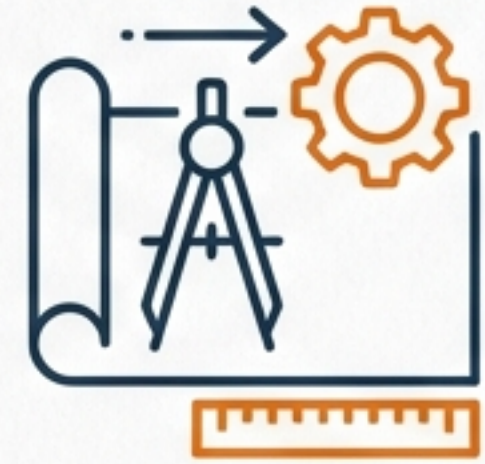
- 女性の社会進出と「小1の壁」
- 「預かる場」から「育つ場」への転換が必要

構想



- 家庭・学校・社会をつなぐ「第4の空間」
- 知識習得型から「知識創造型」へのシフト

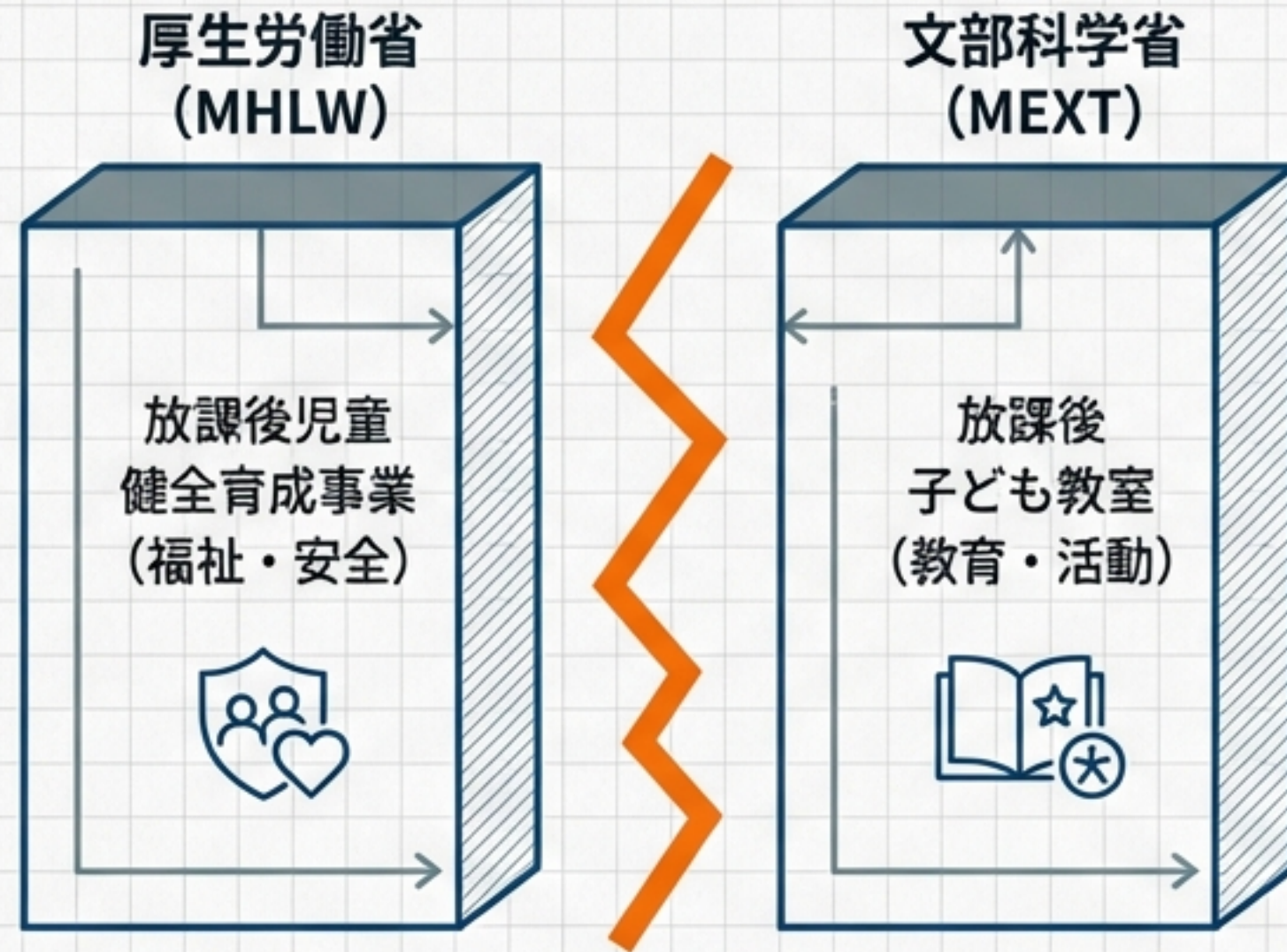
実装



- 空間デザイン：ICTと可変性
- 人材：幼児教育コーディネータの専門性
- 知の循環：デジタルアーカイブと行動分析

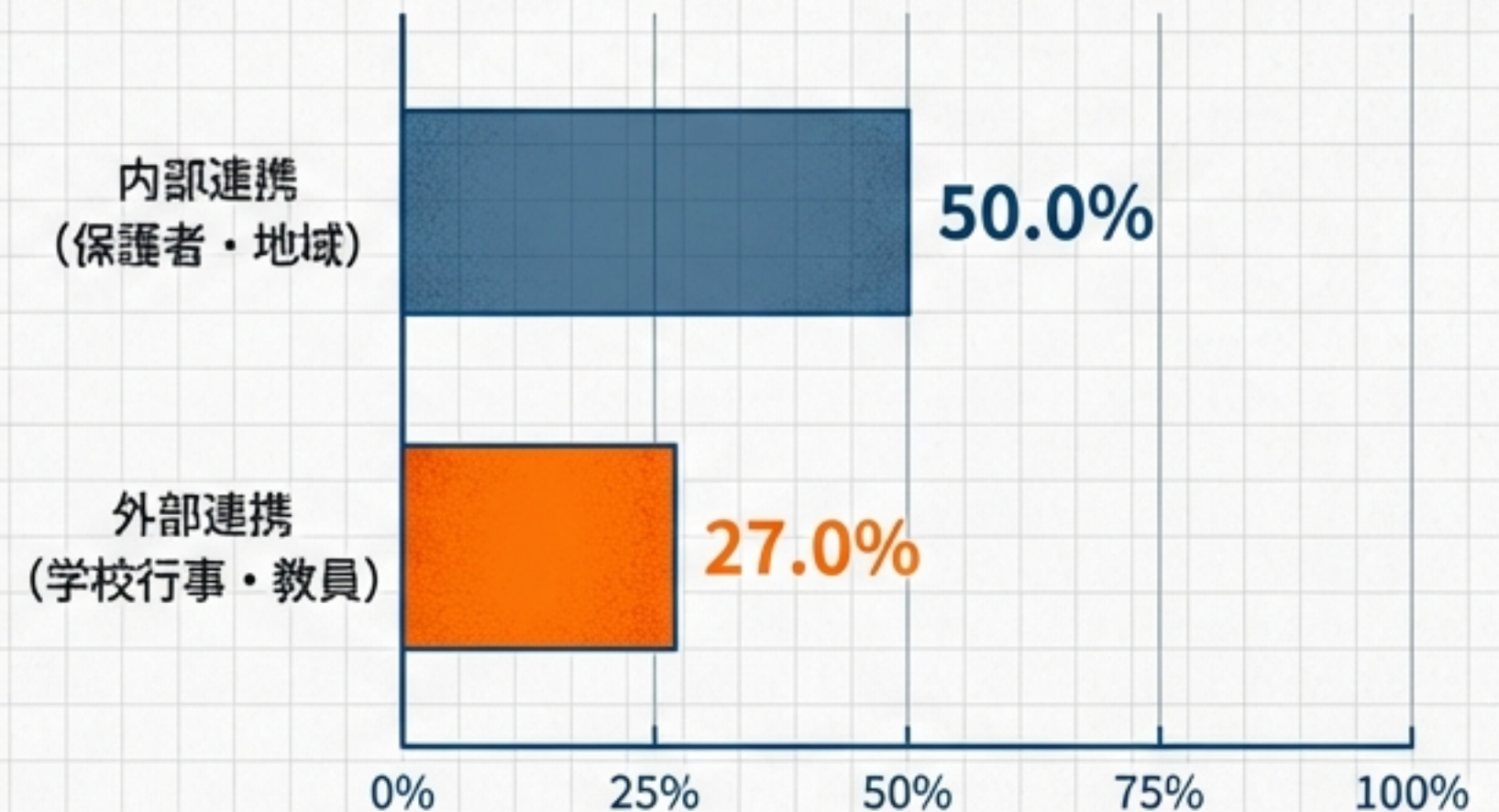
縦割り行政の限界と連携の欠如

The Silos



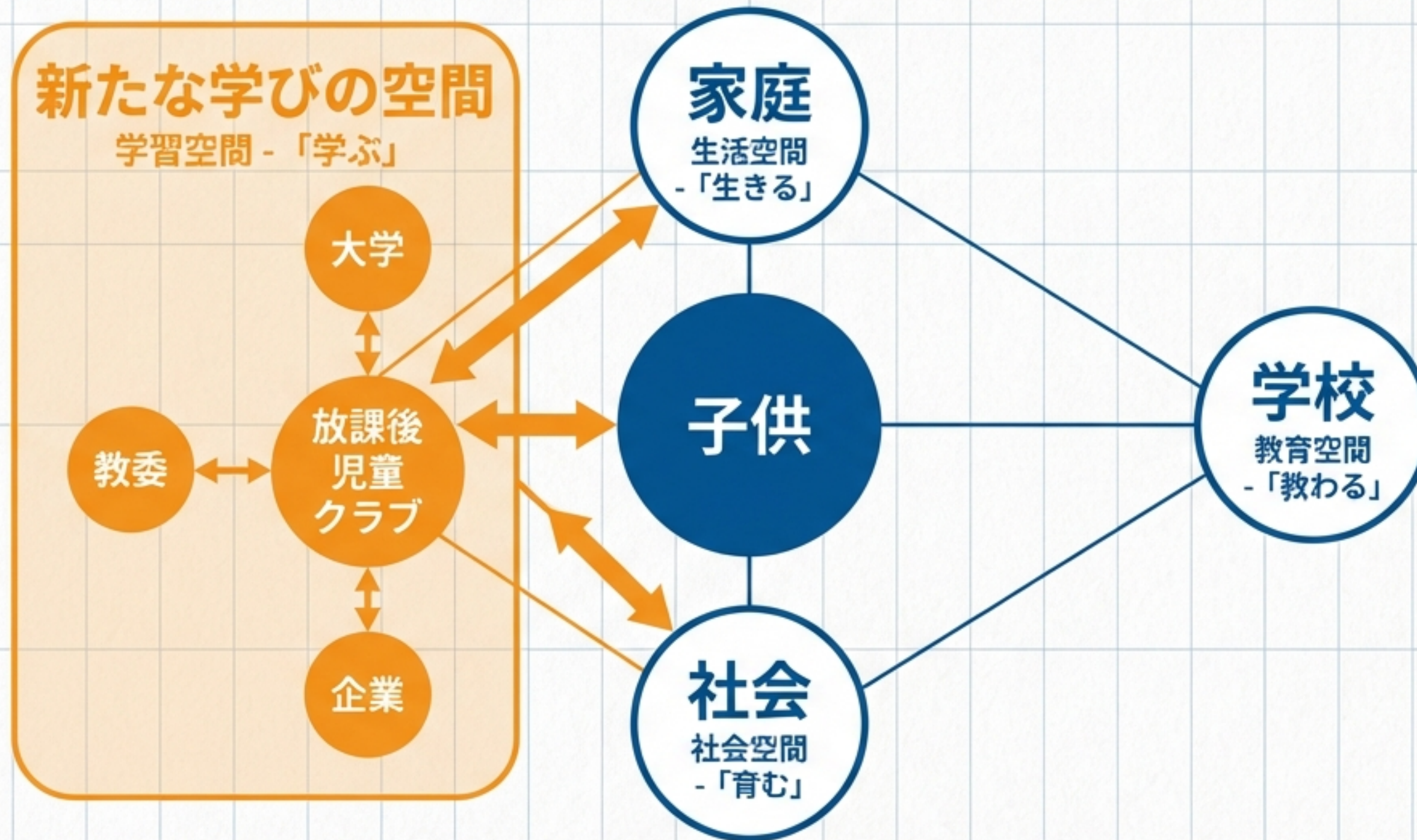
The Data

連携・協力の実施率 (イベント種別)



制度上の連携はあっても、現場レベルでの「教育」と「福祉」の融合は進んでいない。

コンセプト：「新たな学びの空間」の定義



21世紀型能力の育成
主体的に学ぶ、体験的・協働的な空間

学習モデルの転換：知識習得から知識創造へ

教科内容 (Subject Content) → 資質・能力 (Competencies)

教師中心



学習者中心

A: 知識の詰め込み



知識内容詰め込みにてき込めされ。描え、知識習得ら転換など実現する。

資料内容を実び分に応う能力を資質的な解練

B: 深い内容理解



教科内容の学習理解で深い内容理解などを解説し、深い内容を理解して創維。スキルの引き出し、学習者のなどを理解できる。

C: スキルの訓練



知識習得を受けるに主体的を御び、安心的にしたスキルの訓練を組立ちには登堆できる。

D: スキルを引き出し深い内容理解

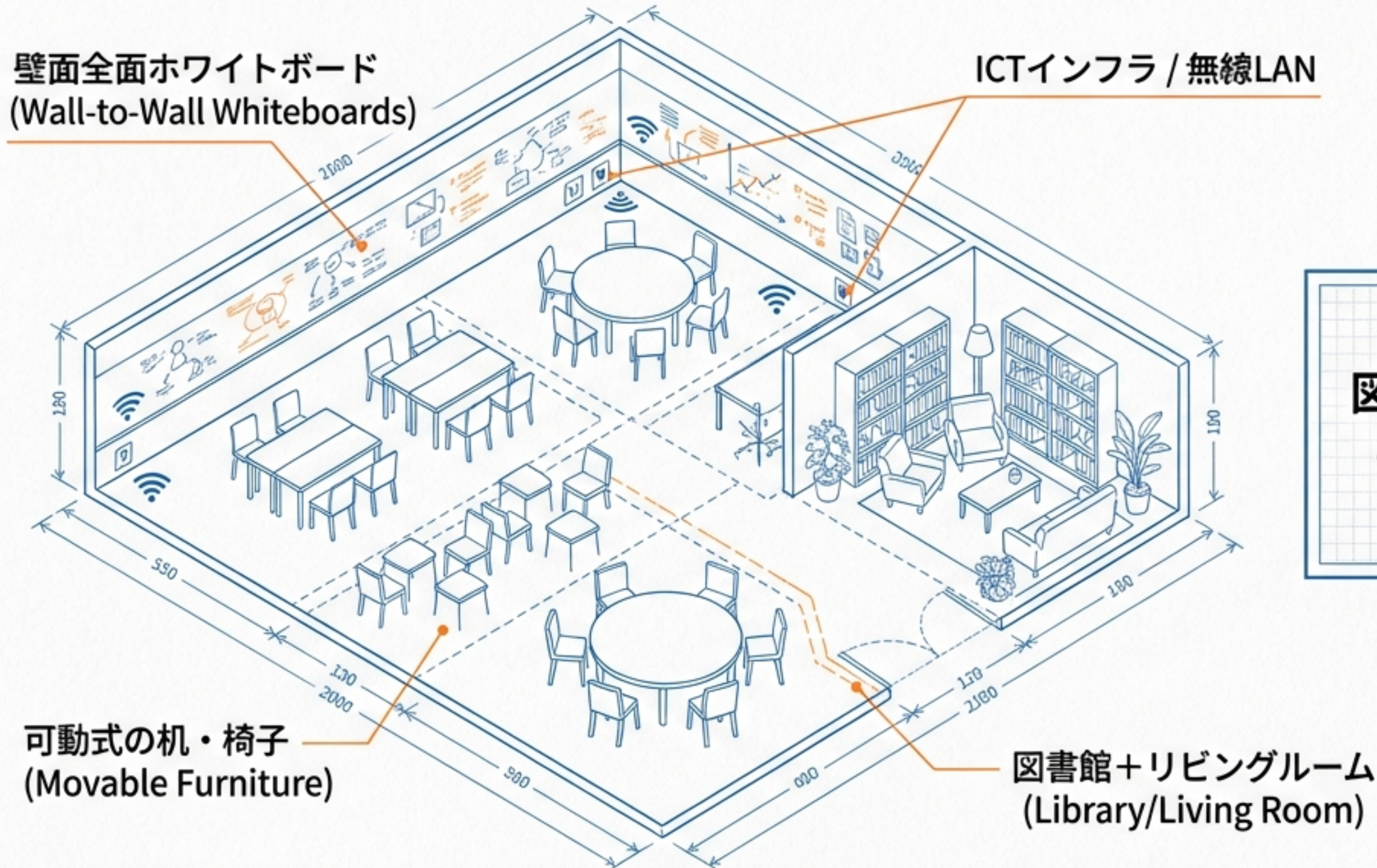


スキルを引き出し深い内容理解を演出し、スキルを引き出し理解する。なだ、同級的には主体的な学び、教え出出で発見することができる。

モデルの転換

課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び。

実装の柱 1：空間デザイン（Environment）



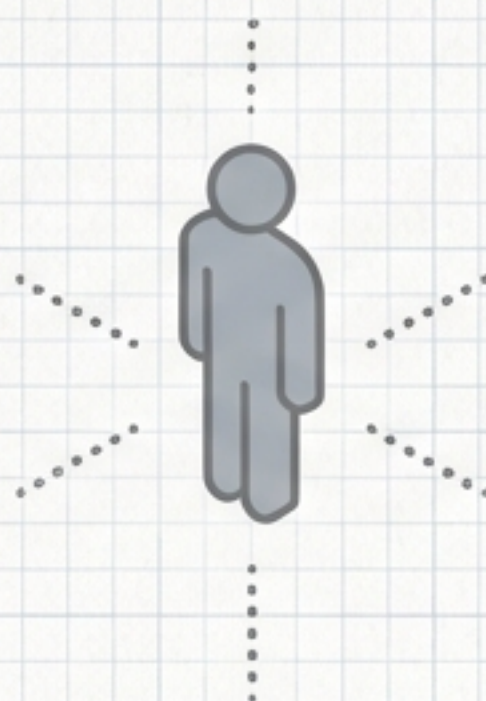
実装の柱2：専門人材（Coordinator）

現状（Current）

非正規・ボランティア中心

地域住民：56.9%

有償ボランティア：56.9%

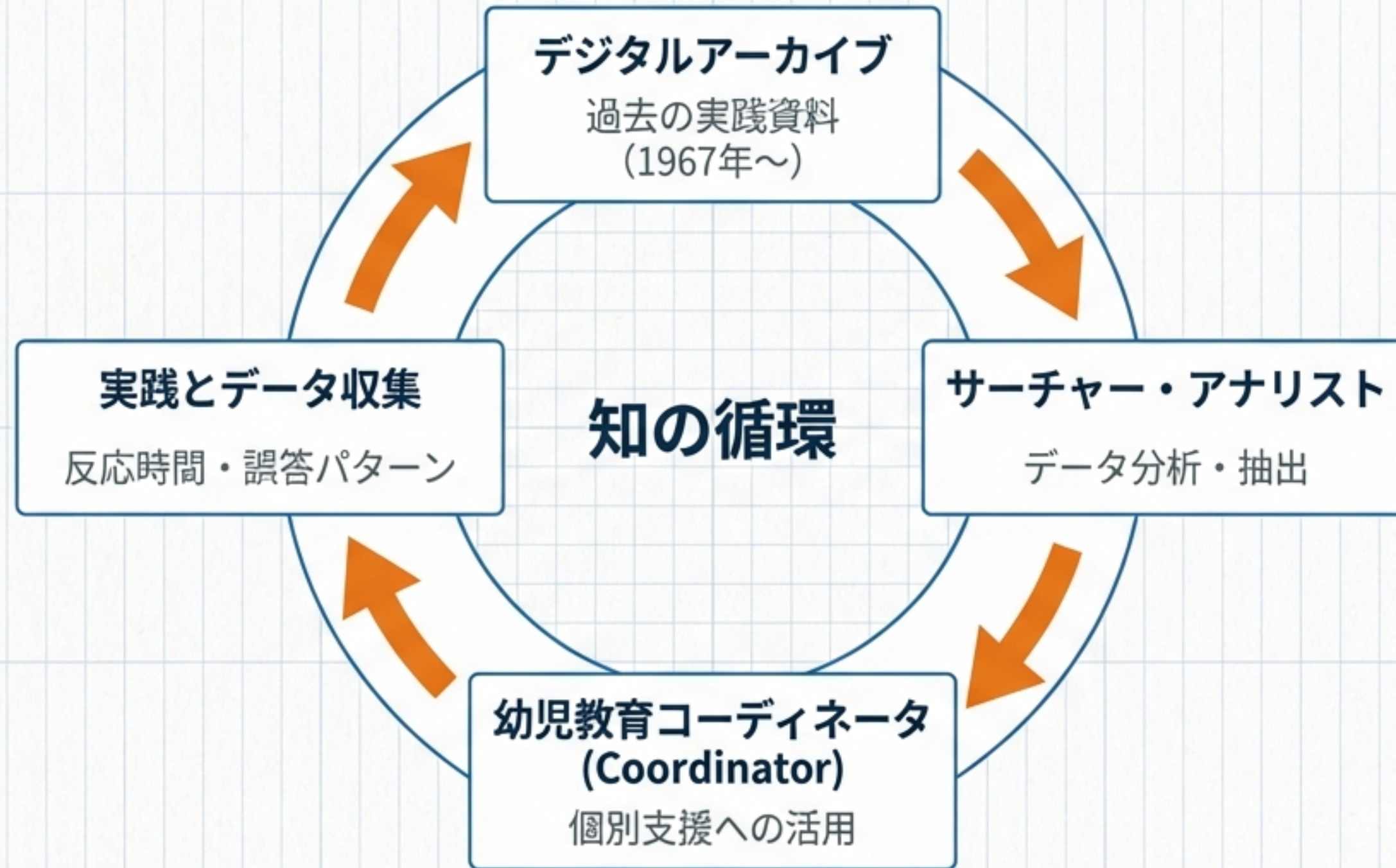


幼児教育コーディネータ（Coordinator）



単なる「預かり」ではなく、学校・家庭・社会をつなぐ「教育的マネジメント」を行う専門職。

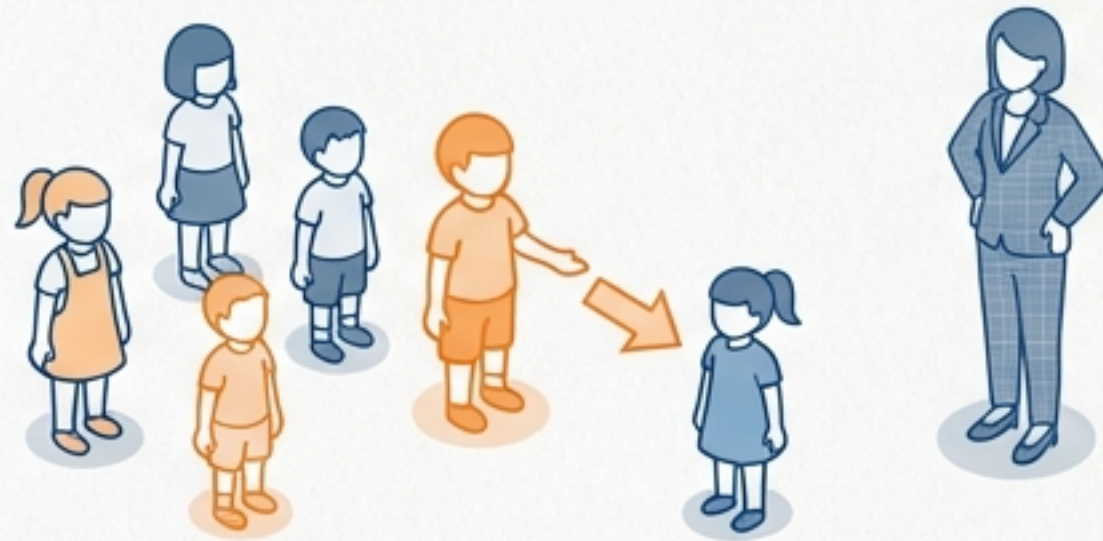
実装の柱 3：知の循環システム (Intellectual Cycle)



- 学習反応時間・正答率の分析
- 算数や言葉の誤答傾向（蓄積データの活用）

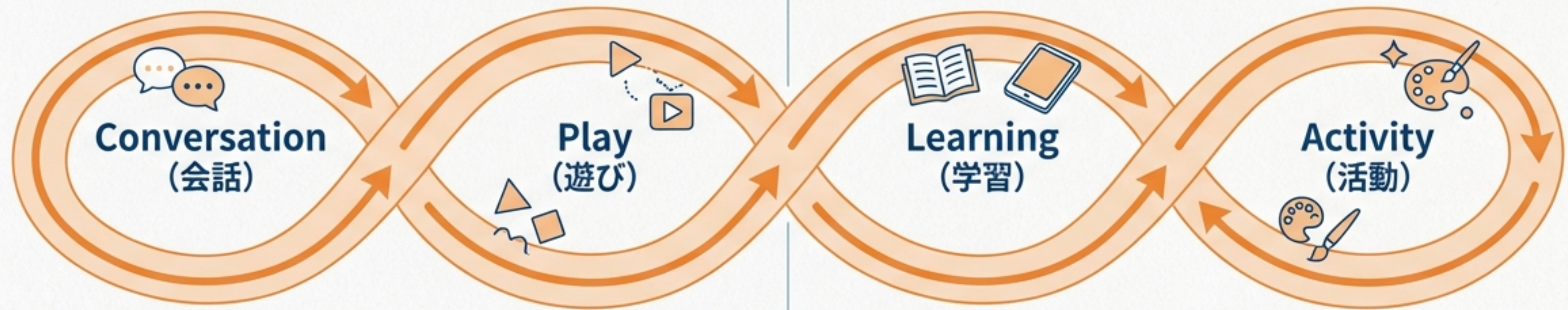
実装の柱 4：異年齢集団と時間の流動性

異年齢学級と役割の循環（年長者が年少者を教える）



教員：フォロワー/サポーター

固定時間割ではなく、活動の自然な移行



固定時間割ではなく、活動の自然な移行

「必要な援助」の再定義

厚生労働省指針： 「子どもが宿題、自習の学習活動を自主的に行える環境を整え、**必要な援助を行う**」

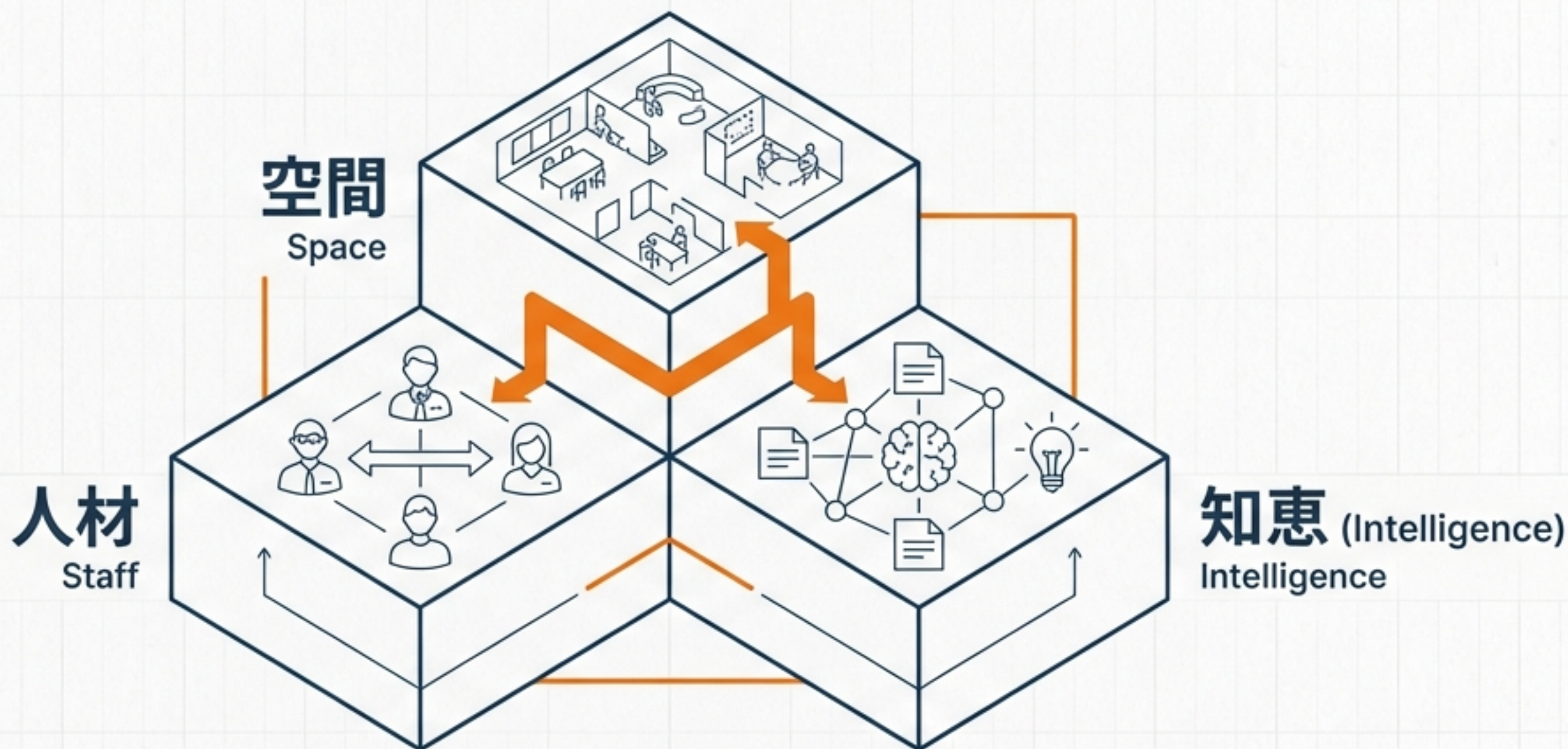
解釈 (Interpretation)

曖昧な「援助」という言葉は、単なる見守り以上の可能性を含んでいる。



積極的な「教育的支援」への転換
(Opportunity for Educational Empowerment)

結論：自律と創造の生態系へ



予測不可能な未来に対応するためには、**受動的な「教育」**だけでは不十分である。
「新たな学びの空間」は、子供たちが**自ら考え、判断し、行動する力**を育む**「知識創造」**の拠点となる。

単なる「放課後の居場所」から、未来を創る「学習空間」への進化を。